

日本色彩学会賞

第29回日本色彩学会賞を受賞して

On Receiving the Color Science Association of Japan Award

富永 昌治

Shoji Tominaga

長野大学

Nagano University



この度第29回日本色彩学会賞を受賞させて頂き、大変光栄に思います。本稿では、色彩分野の研究をスタートした初期の状況についてお話させて頂きます。私のこれまでの研究は、情報科学の分野からみた色彩研究でありました。少し限定すれば、信号処理や画像処理からのアプローチになるかも知れません。興味ある研究課題が沢山目につき、多くのテーマに取り組んでいました。

私が日本色彩学会に入会したのは1982年ですが、それに至ったきっかけがあります。私は電気工学科出身で、1975年大学院博士課程を修了まじかの時点で、指導教授の田中幸吉先生から、当時、兵庫県尼崎市にあった通産省電子技術総合研究所大阪支所を訪問して納谷嘉信支所長に会ってくるよう言われたのです。電総研大阪支所は、当時色彩科学における国際的に有名な研究拠点で、多くの優れた研究者が活動していました。そのため教授も私も、当然、色彩に関する研究を想定していました。ところが納谷先生からは、色彩分野は研究者が多くおり、論文も出ているので、この分野ではなく、放射線計測の分野で、論文を書いてもらいたいとの依頼でした。支所には標準計測研究室と産業計測研究室の2つあり、前者はX線や γ 線といった計測機器の校正試験をやっており、後者は主に色彩計測であったと思います。

分野の違いに大きく逡巡しましたが、結局放射線やることにしました。放射線は危険な線源を扱うため、本庁舎と別の離れたところに放射線実験庁舎がありました。室長は本庁舎で仕事することを勧めましたが、離れているので放射線庁舎で過ごすことにしました。滞在は1年間と短かったですが、情報とは縁を切ったのんびりと過ごしました。熊取町にある京大原子炉実験所や関西電力の高浜原子力発電所を訪問したり、放射線分野の人と交流したりしていました。研究したのは、X線や γ 線のエネルギー分布の推定問題でした。エネルギー分布の横軸はeV（エレクトロン・ボルト）です。この分布は色彩の世界の分光分布とよく似ているのです。つまり色彩では可視光の400nmか

ら700nmの波長域を取り扱いますが、この並びは光のエネルギーですから、放射線のエネルギー分布と同じなのです。この研究に携わったのが、後年色彩科学で分光イメージングやマルチバンドイメージングといった私の主研究の一つに繋がったのです。

一年後、電総研から大阪電気通信大学に移りましたが、納谷先生や電総研の人たちと交流は続けていました。私立大学は国立大学や研究所と違って、研究組織はありません。教員が独自の研究テーマを設定して推進しなければなりません。当初は放射線エネルギー分布の問題を継続し、その間もライフワークとなるような研究テーマを探していました。当時の色彩画像機器は貧弱で、プリンタやディスプレイはフルカラーでなくて限定色表示で、カメラはデジタルでなくフィルムでした。しかし色彩画像のフルカラー化が進み、その処理が必須となると思い、色彩画像の研究をすることにしました。これが具体化できたのは、大阪電通大で大きな研究助成金を獲得したことです。これで当時は大型計算機センター等にものみ設置されていたフィルムを読み取るドラムスキャナーを購入することにしました。研究助成でも資金が十分でないため、インターフェースやソフトウェアは自作とし、本体のみを購入しました。一年後にやっと画像計測ができるようになりました。

この時点で納谷先生に当学会への入会をお願いしました。先生は電総研退職後、大阪電通大教授として着任され、より身近になりました。先生は私の研究について高く評価していただき、また色彩科学研究の動向、研究の進め方、それに対する心構えをご教示頂いた気がします。大阪電通大をご退職後も研究活動が衰えることなく、電話で長時間色々お話ししたり、晩年は病院でご自身の残された研究テーマについて熱く語られました。このため先生の長年にわたる研究資料はすべて私が引き取り、関連する研究者に伝達することにしました。私にとって色彩科学研究の師でありました。